

オーディオ実験室収載

スピーカーアキュライザーの導入(26)

—アナログ対デジタル(11)—

1. 始めに

前報(25)に引き続き、アナログ音源とデジタル音源の比較を行ってみます。

2. スピーカーアキュライザーSPA-7の試聴方法

スピーカーアキュライザーSPA-7の設定条件は前報(2)に述べたとおりとしますが、ケーブルの接続条件を前報(14)のとおり替えています。

試聴音源はヴィヴァルディの「四季」に固定し、アナログ盤、CD、DVD、BD、STAGE+から選択します。

アナログ盤

PHILIPS 6599 125~142 (ヴィヴァルディ全集)

イ・ムジチ

PHILIPS 412 633-1

フェリックス・アーヨ (ヴァイオリン)

イ・ムジチ

PHILIPS 27PC-70

ピーナ・カルミレッツ (ヴァイオリン)

イ・ムジチ

RCA RGC-1033

ヴィットリオ・エマヌエレ (ヴァイオリン)

ソチエタ・コレルリ合奏団

LONDON SLA(A) 1020

Alan Loveday (ヴァイオリン)

ネヴィル・マリナー指揮 Academy of St. Martin in the Fields

CD

PHILIPS PHCP-3430

マリアーナ・シルブ (ヴァイオリン)

イ・ムジチ

PHILIPS PHCP-9257

サルバトーレ・アッカード (ヴァイオリン)

マルガレット・パチェッル他

BD

CAMERATA CMBD-80004

パオロ・フランチェスキーニ (ヴァイオリン)

イソリスティ・ディ・ペルージャ

DVD

BBC OA 0819 D

ジュリア・フィッシャー (ヴァイオリン)

Academy of St. Martin in the Fields

STAGE

アントニオ・ヴィヴァルディ 《四季》 協奏曲ト短調《夏》

《四季》 協奏曲ヘ短調《冬》

アンネ=ゾフィー・ムター (ヴァイオリン)

ムターズ・ヴィルトゥオージ

アントニオ・ヴィヴァルディ 《四季》

トレヴァー・ピノック指揮イングリッシュ・コンサート,

アントニオ・ヴィヴァルディ 《四季》

ジャニーヌ・ヤンセン(ヴァイオリン)

キャンディーダ・トンプソン, ヘンク・ルービング, マールテン・ヤンセン,

Stacey Watton, Liz Kenny, ヤン・ヤンセン

アントニオ・ヴィヴァルディ 《四季》

アンネ=ゾフィー・ムター(ヴァイオリン)

トロンハイム・ソロイスツ

アントニオ・ヴィヴァルディ 《四季》

レスリー・ピアソン(ヴァイオリン)

クラウディオ・アバド指揮ロンドン交響楽団

3. スピーカーアキュライザーSPA-7の試聴結果

アナログ盤はLP-12、CDはEMT981、BDとDVDはDMR-UBZ1、STAGE+はPC経由で再生します。

イ・ムジチのヴィヴァルディ全集のアナログ盤は、イ・ムジチの四季は多くの録音があるので、どの時点のマスターからの収録が不明です。明るく華やかな演奏はまぎれもなくイ・ムジチの演奏で、チェンバロの音が鮮明に入っています。全集のためのカットインのしなおいのせい、若干鮮度感が低下しています。

アーヨとイ・ムジチのアナログ盤は、1959年の録音ですが、音質はフレッシュで、ゆったりとしたテンポで、明るく鮮明な演奏を聴かせてくれます。アーヨのヴァイオリンは艶やかでいかにもイタリアのバロックらしい華やかな演奏です。四季と例えばイ・ムジチとの評難をとり、バロックブームを牽引した盤です。

カルミレッツとイ・ムジチのアナログ盤は、1982年のデジタル録音です。デジタル録音らしく、アーヨ盤と違ってすっきりと切れ味の良い音になっていますが、弦の艶は後退しています。

エマヌエレとソチエタ・コレルリ合奏団のアナログ盤は、録音時期は不明ですが、ナロウレンジで、独特のフレージングの演奏スタイルです。明るく華やかなところはイタリアのバロック演奏のようです。

Alan Loveday とマリナー指揮 Academy of St. Martin in the Fields のアナログ盤は、イ・ムジチのスタイルとうってかわって、ややアップテンポ気味で抑揚、強弱があり、装飾音符的な奏法など、斬新な演奏スタイルで当時評判になった盤です。現代ではどうということではありませんが、当時は驚かされた思い出があります。

シルブとイ・ムジチの CD は、1995年の録音ですが、アーヨのアナログ盤よりややアップテンポで切れのよい演奏ですが、アナログ的雰囲気もあってイ・ムジチらしさは十分に味わえます。

アッカードとその仲間の CD は、1987年の録音です。アーヨのアナログ盤と同じくゆったり目のテンポで、バッハのヴァイオリン曲などを得意とするアッカードなのでバロック的な雰囲気が濃厚にでています。

フランチェスキーニとイソリスティ・ディ・ペルージャの BD は、わずかしか所有していない BD 盤で 2012年の録音です。BD というフォーマットに期待して購入したのですが、特段に CD に比べて音質上のメリットを感じなかった印象があります。今回聴き直してみても、イタリアのグループらしい演奏スタイルで確かにディテールの表現でのメリットがあるようですが、少し潤い感が不足し、コストパフォーマンスはどうかというところが残ります。小鳥の鳴き声や狩の鉄砲を模した擬音が入っています。

フィッシャーと Academy of St. Martin in the Fields の DVD は、いかにも現代の演奏らしく、カジュアルな服装で植物園のようなところでの演奏で、映像にもそれが取り込まれています。以前の印象とは違って、フィッシャーのヴァイオリンもより自然な音色になっており、ダイナミックな若々しい演奏が味わえます。映像とともに小鳥の鳴き声や水音など自然の音もはいつています。

アンネ=ゾフィー・ムターとムターズ・ヴィルトゥオージの STAGE+は、ベルリンのクラブのようなところでの映像付きの収録でカジュアルな雰囲気の中で、半ばエンターテインメント的にムター節を披露しています。

トレヴァー・ピノック指揮イングリッシュ・コンサートの STAGE+は、すっきりと爽やかな演奏でディテールの再現も十分です。

ヤンセンとその仲間の STAGE+は、ややアップテンポ気味で、すっきりと切れのよい現代的な演奏です。

ムターとトロンハイム・ソロイスツの STAGE+は、1999年デンマークでのライブの収録と記載されており、先の映像付きの演奏とは違って、ヴィブラートを効かせるところはムターらしさがありますが、テンポやフレーズはオーソドックスな演奏スタイルを取っています。

ピアソンとアバド指揮ロンドン交響楽団の STAGE+は、やや緻密さに欠けますがひと昔前のアナログ盤のような厚みのある音でのオーソドックスな演奏です。

4. まとめ

収録年代と音源の種類と再生ルートが異なる音源が、一様にスピーカーアキュライザー導入以降、音質が向上し、アナログや STAGE+の古い音源もフレッシュな印象で聴けるようになっていきますし、STAGE+の音源もアナログに迫る音質で聴けるようになっていきます。多くの演奏を聴いたわけですが、演奏スタイルや音質の違いがよく分かるようになっていきます。

以上